

渦の支那

原岡武

走馬燈の様に目の先に廻轉して行く支那の状態は容易に正體を掴む事は出来ない。支那の舞臺は餘りに大き過ぎるそれに舞臺で飛んで跳ねる役者が餘りに多種多様である。よく私は云ふのである。日本人は支那の正體を窮めんとせず、何んでもかんでも皆日本の様に整備していると許り思ふ嫌ひがある。例へば軍隊にせよ、國民にせよ、政治家にせよ、教育の程度にせよ、餘りに日本化して考察しすぎる。軍隊等は方程式で表はすと、海軍は海軍、陸軍は陸軍、空軍は空軍、海軍は海軍、陸軍は陸軍、空軍は空軍なるのである。決して國家觀念、愛國思想等は藥にしたくも持合せがないのである。其の日、其の日を糊する爲め、又は寢所を得るために過ぎないと云ふと、餘り酷評だと非難されるだらうが、偽りのない所である。支那の事情は全然支那の頭腦になつて考察せんと、飛んでもない間違ひを生ずるのである。以下私は秃筆を馳せて思ふ存分に眞實を解剖して見ようと思ふ。

支那の現状は大體左の分類に従つて考察される。

一、東北政府

二、安福系の蠢動

三、共產黨

四、廣東政府

五、南京政府

一、東北政府

東北四省即ち奉天・吉林・黑龍江・熱河の四省で、

「これに察哈爾の一部」は奉天政府の地盤或ひは勢力

圈内とも云ふべき地方で、此れに直隸・山西を其圈内に握つて居た。おん大は張作霖の御曹子學良で、作霖の後を襲ふて以來部内の新舊鬭争、今や東三省を擧げて渦中に投ぜんとするの際、非常なる果斷と勇氣を以つて先づ楊宇霆、常蔭槐の二人を銃殺し、新舊兩派の紛争を抑壓して來た。其の間十八年には露支問題不成功に終り、南京政府の傀儡となり了せて今日まで來たのである。

東北各省首席は吉林の張作相、黑龍江の萬福麟、熱河の湯玉麟で、以上の四氏が東北四省に蟠居して關外の政治外交には一切南京政府の容喙を許さない状態を呈して居た。十七年張作霖、爆死後に新舊兩派の軋轢日本の勸告等にて一時南京の魔手は手の下し様がなかつた。が何地も同様排日の聲、火の手は上らずには置かなかつた。

一體張作霖存命中、日支の關係は面白くなかつたに加へて爆死問題で、全滿を擧げ對日感情は悪化した。

此れには露の赤化も大に與つて居た事だらう。奉天派が漸次新支那青年政客の甘き蜜にたかる様になつて來た。日本よりの易幟不可の勸告にも何等好意を有たず、滿蒙を擧げて青天白日旗下に走る事となつた。日本の生命線は根柢より覆されて了つた。滿蒙に於ける日支交渉案件は山積して三百件の多きに上つて居る。

全支に於ける排日、日貨、打倒帝國主義の聲は特殊圈内まで漲り互つた。學生、青年の排日宣傳は言語に絶するのである。此等の連中は滿蒙の寶庫は如何にして維持され、生命の安全（比較的）が維持されて居るか靜かに考ふる腦力を持ち合さないのである。勿論日本の御蔭で東西の安泰が保てるなんと云つてもそれは日本からの押し張で吾々には痛痒を感じないのだ。日本は思ふ存分に滿蒙から利權を絞り取り所有利益は皆搾取し去つてしまふのだと。此うした錯覺からして全滿の青年や政治家共は南京の國民黨部の操縦する所となつて居る。で上は張學良より下は一兵卒に至る迄、排日、

悔日、打倒帝國主義を高唱して居る。此れが民國八年五月四日（北京）で在北京全男女學生の排日の烽火を擧げてから斯うして年々其度合が濃くなり、漸次激越となつて來た。約十三年間醞釀して來たのである。爲不爲の差別を付け得る能力のないものに浸醇して來たのだからたまらない。最も親善である可き地方、最も日本を了解して居る筈の地方人士が全然反對行爲に出る事となつた。此れに就いては種々な深い理由もあるだらう。或は何等理解力無いものが一大嘘を吠え萬大これに倣うた類であらう。利權の回收、排外思想、中華事大病等にも起因してゐるであらうが、何れも極素直に表言すれば各自己の懷具合、立脚地の踏み固めが或は此れより大に賣り出さんとする野心に翻弄されての現出としか受取れない。到底眞の憂國愛國の聲ではない。日本の生命線、特殊權益は如何にして得たか、十萬の生靈と二十餘億の犠牲を拂つたかと云ふ事に就いては更に了解して居ない、あれは日本の要らざるお

せつ介で、そんな押賣りの恩は感謝しなければならぬ程の價值が何處にあるかと云はん許りだ。支那國定排日讀本には日支關係總説、歴史的事件、政治、經濟、社會の五部に分つて盛んに排日の趣旨を記載して居る。斯して全支排日、悔日の氣勢は揚げられて居た。中村大尉事件に發端して奉天政府は非と認めなければならぬ事となつた。張學良は五月南京で全國代表會議が開かれそれに出席した。歸途北平に立寄つたが不幸にして病魔に襲はれ靜養中に中村大尉事件が勃發したのである。參謀長榮臻（奉天派、張學良系）が北平の張副司令に報告、此の事件に對する交渉要旨を授かる可く出かけ、歸奉間もなく九月十八日滿鐵沿線の柳條溝に於て王以哲（未詳）旅長の部下が線路を爆破した。日本守備兵は直に自衛上非常手段を取る事になり、即夜北大營を占領した。茲に滿洲問題は世界人の前に展開される事となつた。

抑も支那人は事大思想に囚はれてる、日本組し易

し。滿蒙の天地より馳逐するは朝飯前の事位に謬想してゐた。常に日本は恐米病に罹つて居る。日支衝突せば米國は必然日本に強壓を加へるに違ひない、又露も支援する。そうすれば日本の利權を奪回するには最好

時機だと全奉天政府は妄斷したのである。斯うして計畫的に敵對行爲を始めたが、一夜の中に奉天政府は覆没してしまつた。留守役の臧式毅（奉天派、楊宇霆系）は奉天占領と同時に姿を消し、全く東北四省政府は没落して了つた。續いて滿洲全體に渡り日本人生命財産の安固を期する爲め支那兵の武裝解除、兵匪討伐が行はれ、吉林の張作相、黑龍江の萬福麟、馬占山が遁竄する事となつて全滿の張學良黨のものは姿を消す事となつた。其後には未だ確乎たる地方政府は組織されるに至らないが、大體奉天省では袁金鎧（奉天派）が委員制度の下に委員長に擧げられ、省政府を設立する事となつた。此間恭親王、宣統帝が迎へられ復辟派の暗中飛躍があつたりして混沌たる光景を呈したが、

其後袁氏の勢力が増進し來て殆んど確立するんではないかと思はれる。日本としては一日も早く地方政府の確立、地方治安を希望するものである。或る程度の援助を與へ地方人民の福利増進を促進せねばならぬ。

奉天省政府は袁一派により政權を掌握される事となるであらう。吉林省では熙洽（奉天派）が吉林政府委員長に就任した。平常から全吉林の人望を一身に集めて居た、張學良派の遁逃に乗じ治安維持の重責を負つて立つ事となつた。此後當分は此の一派により政權を掌握されるであらう。更に黑龍江省政府は張景惠（奉天舊派）と馬占山との間に於て黑龍江省政府の首席に就き商量中である。馬占山は十一月八、九日の日支戦闘で痛く日軍に擊破され、遂に僅かに三千の手兵を率ゐて齊々哈爾を撤退して海倫に身を寄せたのである。其後日軍使の往訪で黑龍江省府の樹立に光明を見出さんとするのである。

東三省は九月十八日、日支兩軍衝突以來各省共兵力

を失つて了つた形となり、又財政も根本から覆へされた。各省は張學良の羈絆を脱し獨立する事となつた。滿蒙自由國家を建設して、一、日支共存共榮。一、經濟根幹たる鐵道の敷設は日本に全然據る。一、國防は日本に依頼し對露對南支策を確立する。一、日本の特殊權益を確認する。云々と發表されて居る。而して日資と智能を入れて大に滿蒙の寶庫を開かんと企圖するものゝ如し。

張學良は始めより蔣介石の傀儡となり南京の笛に依つて亂舞狂態を演ぜんとしたのである。蔣の胸中胸底奥深く秘められたる何をも見出す事出來ず、中央黨部或ひは市黨部のお先棒となり濟まして排日抗日に熱中し日本の權益を驅逐する爲めには事の善惡可否を判別する腦袋を有せず、妄りに夷を以て夷を制し得るものと信じ、國際聯盟に縋り或は米國の從來對支好意は必ず不戰條約に訴へ、日本を窮地に陥るゝものなりと確信した。又露も立つて日本の勢力を驅逐する事になる

と空頼みしたのである。昔から自力に依らず他力本願の支那は實際身の程を知らぬと云ふ可きか、餘り世界の大きさに暗過ぎた。其結果、毛を吹いたのであらう。滿蒙の形勢は全然張學良より脫離してしまつた。仍錦州政府を設立して東三省奪回、日軍驅逐を夢みてる。又各地の敗兵、土匪共を使喉糾合して滿鐵沿線の攪亂を企圖してゐるが人心は去り、財源は覆され、烏合の衆五萬、十萬を擁すとも羽なき鳥同然、縱令直隸熱河兩省に依りて多少は支持し得らるゝとしても十分士氣を鼓舞し得るとは思はれぬ。轍水の鮒魚餘命幾何もなきものだ。干學忠、萬福麟、榮臻、王樹常、張學銘、奉天派の諸軍閥も今や命旦夕に迫り落日寂寥たる光景を呈して居るが日軍を包圍し撃滅せんと豪語してゐるのである。

屋臺が搖れて來ては心の底から忠勤を勵まうとするものは皆無。斯う奉天派の影の薄くなつては學良の下野も目睫の間に迫つてると見るも誤りではない。で私

は東北四省政府は壊滅するものと信するのである。此れに代る所の新政府の出現は必定である。

二、安福系の擡頭

段祺瑞（安福派首領）を擁して暗中飛躍を試みんとする氣配あり、此の一派に新舊交通系が加はり蠢動するものと見なければならぬ。そうなれば可なり大なる渦が捲き起る。先づ天津の張學銘や王樹常等の奉天派を驅逐し、張學良の根據を覆し南京政府の大外様を倒壊するのではないかと思はる。もし此れが實現するの日ありとせば、山西の閻錫山（國民黨）、陝西河南の馮玉祥（同）、山東の韓復榘（同、馮玉祥系）、其他舊軍閥が蹶起し蔣介石打倒の旗を擧ぐるに違ひない。此外四川の蛾眉山麓に看經に韜晦し全く時事を談ぜず、焉ときめ込める吳佩孚を推戴して甘肅、四川、青海の一帯において蠢動せんとする一派も表現せんとする形勢にあり。此兩派合流して南京政府倒壊を企圖する事と

なれば支那は全く收拾出來ない混亂状態を呈する事となる。

三、共產黨

全支那の形勢を説述するには是非共產黨の現況をも略述し置く必要がある。最初孫文が國民黨國家を創立するには露の赤化が尤も適切であると確信し、ポロヂン外數名を迎へ容共政策の下に天下を取る各種の計畫を運らされたのである。十五年夏廣東政府が蔣介石を總師として共產軍を率統し、北伐の途に上つて以來僅か數ヶ月ならずして江西、湖南、湖北を風靡し武漢の地に共產政府を創立した。其の翌年三月には南京を陥れ、江蘇、安徽、浙江、福建を手中に收めて了つた。此れで長江以南は國民黨、共產黨の天下となつた。茲に強調して置かなければならぬのは、支那民族性は何れの時代を問はず利己主義、御都合主義の權化である事。北伐軍も稍々成功ると見るや共產主義は孫文の三

民主義と相容れざるものだ。排共々と猫眼の變はる様に「ポロヂン」も何にもあつたものでない。支那人は何事に拘はらず凡てが此の通りだ、と用心す可きだ。決して安心して靠れるものでない。國民黨が天下を取る爲めの容共政策は見事成功したが、輿論を押切るには赤化運動は餘りに淡いものになつた。併し一旦此れに陶醉赤化し了ふせた主義者は排共連の云ふ様に簡単に豹變軟化する事は出来ない。此の宗旨を死守尊崇する徒輩は全支各界に相當ある。外交時報本年秋期倍大號に船津辰一郎氏が「支那赤禍の責任者は誰か」の題下に赤匪禍害の程度を南京政府中央研究院長楊杏佛氏が最近自ら江西省に行き實情を視察した結果、報告が比較的信頼するに足るものだとして其概要を記載してある。以下其の重要な部分を載せて共產黨の現形勢を知る資に供しよう。

一、辛亥革命（明治四十四年）以來、清朝は亡びたが革命の理想は今猶ほ實現すること出来ない。過去二十年の間、軍

渦の支那

閥は軍閥と戦ふ有様で、或は軍閥と革命勢力と戦ひ、國內の戦争殆んど毎年絶えず、即ち統一の事業は未だ成らざるに、江西、湖北、湖南に於ける空前の赤禍は已に燎原の勢ひを成して居る。今日の赤軍は第三國際とソヴェット露西亞の後援の下に、立派なる黨政軍の組織を有し、決して歴代の流寇や最近の軍閥とは日を同うして語るべきものでない。故に今日の赤禍は江西省に集中されてゐる様なれども、湖北、湖南の諸隣省まで蔓延し、其の隱患は實に全國に普及するものと言つて差支ない。過去に於て兎角赤禍を輕視する嫌があつたが、是は獨り人民の鈍感を責むるわけに行かぬ。政府及軍隊の報告が真相を隱蔽し太平を粉飾せしに因るものである。此種不實の宣傳は常に人民に錯誤の觀念を興ふるばかりでなく、常に赤賊討伐軍失敗の主因を爲すものである。今やソヴェット露西亞の強權とスターリンの共產主義は、一舉にして中國の軍事、政治と社會の組織を破壊せんとしてゐる。これ吾人の忽視すべからざる所のものである。

二、赤禍勢力の蔓延は三時期に分つことが出来る。第一期は民國九年（大正九年）から十二年の間で、即ち新文化運動利用の時代で、當時陳獨秀や、李大釗の輩がサード・インターナショナルの命令と援助を受け、新青年雜誌や嚮導週報等を發刊し、新文化運動の名を藉りて盛にソヴェットの共產思想を輸入宣傳した時代である。當時中國々民黨は中國政治

革命の指導權を掌握して居つたから、サード・インターナシヨナルは中國共產黨員に命令して、國民黨に加入せしめ、遂に彼の有名なるヨッフエ親しく中國に來り、國民黨の改組に參與することとなつた。第二期は十三年國民黨が改組され、共產黨を容るゝことになつたが、十六年に至り國民黨は共產黨に反することとなつた。此間に於ける時期は即ち共產黨が

國民黨權を盜竊したる時期である。彼の有名なるボロゲンが客郷の地位を以て隱然大權を掌握し、國民黨及各級黨部、各軍政治部や各地民衆團體は幾んど全部共產黨員の把持する所となり、同時に桃發離間、其の所謂國民黨を分解する政策を進行したのである。是に於て遂に民國十六年南京、漢口共に相前後して反共運動を起した。爾來即ち第三期に入りて、今日に至つて居る。其間湖南、湖北、江西等各省に於ける共產黨の禍害は殆んど枚擧に遑がないが、就中其最も著しきものを擧ぐれば、十六年七月南昌に於ける賀龍葉挺の變亂、十六年十二月廣東に於ける共產黨討伐、十九年七月湖南、長沙に於ける共產黨の暴動等である。而して民國十九年の調査によれば、江西全省八十一縣の内七十四縣と、二市は赤化して居る。湖北省六十九縣の内五十餘縣、湖南省八十餘縣は赤化しその他安徽、四川、福建、浙江、河南、山東の各地にも赤匪出沒したことがある。而して其損害は大要を擧ぐれば、江西一省にて共匪の爲めに殺されたるもの約二十萬人以上、燒失

家屋十萬棟餘、財産の損失は約六億五千萬弗、湖南省は殺されたるもの七萬人以上、燒失家屋五萬棟餘、財産の損失千五百萬弗、而して戦争による死亡者及び産業の損失は此内に在らず。共匪の勢力が斯くの如く蔓延強大となりたるは、中央政府が去年閻錫山、馮玉祥等を討伐する爲め全力を其方に傾注し、共匪の討伐を怠りたる爲めである。

三、共產黨の黨政軍組織、中國共產黨は民國十六年以後分裂してスターリン派、ツロツキー派の二つとなり、ス派の中心人物は瞿秋白、張國濤及び紅軍の領袖朱德、毛澤東、而してツ派の中心人物は陳獨秀である。共產黨の最高政治機關は中華蘇維埃共和國中央臨時執行委員會で、八特別區に分れ、其區域は湖南、湖北、江西、福建、廣東、廣西、安徽、河南、海南島等に及んで居る。又た紅軍の組織は中華蘇維埃共和國中央革命軍事委員會がある。其軍隊の實力は、各方面の調査一致してゐない。去年の秋頃には十四軍兵數約七萬人、小銃五萬挺に過ぎなかつたのが、本年三月には小銃八萬挺、兵數二十萬人に達し、即ち十九師五獨立團となり、今年官軍敗北の結果、紅軍の兵數及小銃數は著しく増加し、最近の紅軍兵數は約三十萬人、小銃は約十二萬挺に達するとの事である。其外、各都會には赤色警衛隊あり、農村には農民赤衛隊あり遊撃隊あり、兒童隊あり、少年先鋒隊あり、専ら婦女子を以て組織する慰勞隊及洗衣服隊あり、慰勞隊は多く年若き女子を

以て組織し、洗衣隊は中年以上の婦女子を以て組織す。紅軍は小銃及彈藥不充分なるを以て、常に種々狡猾なる戰術を用ふ。或は官軍を引誘して四面より包圍し、或は東を攻むる風を示して急に西を撃ち、或は強を避け弱を撃ち、或は群衆を利用して官軍に彈藥を徒らに消耗せしめ、或は妙齡なる婦女子や金錢を利用して官軍の銳鋒を腐化させる等、着々其効を奏し、第十八師の如き、赤匪の爲め包圍せられ全軍覆沒、師長張輝瓚は擒にせられたる後遂に殺害せられ、第五十師も大敗し、本年五月兩廣獨立するや匪勢益々盛んとなり、孫連仲公秉藩、王金鈺等の各部隊相繼いで敗北し、胡祖玉師團長亦戰死す。是に於て中央政府も漸く、全力を用ひて之に當るにあらざれば到底赤匪討伐の目的を達する能はざることを覺り一般社會も稍や注意を拂ふやうになり、遂に蔣總司令奮然として親しく馬を進め、殆んど國民政府全軍（約三十萬人）を總動員して赤匪を討伐することとなつたのである（然し是は大に手遅れである）。

四、廣東政府

文教宣べず奇を用ゆ、奇兵は仁義に異なる、王道は迂濶なりとして弊履の如く棄て、顧みられず、仁義王

渦の支那

道の本家本元は詐術に依りて天下と政權の奪掠を能事として居る。一年の内約半年は砲煙彈雨の中にと云ひ度いが、銀丸の遣り取りで、切り崩し戰術を用ひ或は支那在來の個別擊破の戰術を用ひて、此まで四面楚歌の聲にもめげずよく敵の連繫を絶ち、表面支那統一の形態を作れるものは蔣介石（國民黨、浙江派）である。一旦天下と政權を掌中に入れては此れを防守するは、彼に取つては當然すぎる當然さで、倒蔣反亂は要するに、諸軍閥各個の慾望を満さんとするのみで、天下國家の爲めに一身を犠牲に供する底のものではない。何れも皆とつて代らんとするに過ぎない。支那の國民ほど可憐なものはない、こうした諸軍閥、政權慾者の糧となるのみだ。實際塗炭の苦しみに逢はされてるのである。蔣が勢力を有つてる間は倒蔣戰爭は繼續するものと見るべきだ。又此れに代はる軍閥或は権力者が出づれば、同じ事を繰返へされるのである。何時になつたら支那は統一和平が實現されるのか、何れの方面よ

り推測しても見當が付かぬ。蔣は常に自己の権力防護に怠らなかつた。本年五月南京で開かれた國民會議は自己防護手段の雄大なもので、今後の反蔣運動を根絶し自己の勢力を安固にすべく計畫したのである。此れまで個別撃破の戦術で大小軍閥、政治家を打ちのめし驅逐せるもの枚擧に遑ない状態である。此れまでは外部に對する眼の上の瘤の削除であつたが、此れよりは内部の瘤を芟除しなければならなくなつた。それには約法を改定して自己に都合好く、大總統に推さすべく

定めしめんとして威壓的に出で、遂に胡漢民（國民黨右派）を監禁するの暴擧に出でたのである。此れが即ち蔣のグーデターであり、威力の最大表示である。此の對胡漢民態度には尠からず、國民黨の重鎮である、戴天仇、王寵惠、孫科等は皆恐怖して、王、孫は遁逃した。戴は居残つて怖毛ながら仕事をした。

廣東派軍閥としては廣東に據れる陳濟棠（國民黨、廣西派）が居る、蔣はもう殆んど目星しい軍閥は倒し

て了つた、が唯だ北方の張學良丈が残つて居る。此れは當分ゴ用黨として懐柔し、他日を期して芟除せんと胸中に秘めてるに違いない。此の際最も眼の上の瘤として目障りになるのは、何んと云つても陳濟棠である。折角意中の人として廣東に遣はしたものの、虎を野に放つた感がある。何時かは除かねばならぬ。此の運命は陳もよく分つてる、で時あらば反蔣の旗幟を明かにせんとして居た。愈胡漢民の監禁が導火線となつて反蔣、廣東政府を樹立する事となつた。

此の反蔣政府樹立の皮切りとも云ふべきものは、古應芬（國民黨、蔣介石系）が中央監察委員の名を以て蔣の彈劾通電を發したものである。夫れから間もなく廣東政府の樹立、南京國民會議否認の通電が發せられた。政府委員として名を連ねてるものは、汪兆銘（主席）、李宗仁、陳濟棠、古應芬、鄒魯、孫科、唐生智、張發奎、唐紹儀、王寵惠、其他閻錫山、馮玉祥、石友三等である。

此れ等の連中で中心人物となり得るものは、汪兆銘（極左）、鄒魯（極右）、胡漢民（次右）、陳濟棠（軍閥）等で、此れ等を繞る人々が參加せんとして居る。李宗仁、白崇禧、張發奎、唐生智等は反蔣運動を續けてるのだから、陳、汪の反蔣軍運動に呼應する事は、當然だが、其の他の連中は多くは洞ヶ峠の日和見である。

孫科、王寵惠等が連名の中にあるが、元より胡漢民の一派と云ふ程ではない、が自然には同一行動を取るに違いない。支那人は從來の關係緣故を辿つて何黨何派敵味方だと斷定する事は出来ない。凡てはゴ都合主義で其時々々自己に有利に展開し得る途が有ると、容易に豹變する。此れまで腹心のもので容してゐるものでも各自己の立場を堅めん爲めには、潜航艇的に種々な非常手段が講ぜられるのである。であるから金響が効く間は離反せぬが、一朝此の適藥が欠乏して來ると何時足許から鶏が立つかも知れぬ。此れまで度々繰返へされた反政府黨の失敗は、先づ財力が續かなかつた

ので、容易に倒壊した。所が此度廣東側としては南洋方面の華僑連が資金の援助をするのだと思ふ。そうすれば蔣には可なり痛心に堪えないのであらう。

廣西派の首領李宗仁、白崇禧等が廣東入りをして獨立政府の主席に汪兆銘を推すこととなり、南京討伐を開始することに決定した。南京政府よりは國民會議の名で陳濟棠に平和解決すべく勸告したが、遂に應ぜず廣東派は對抗すべく戰備を整へ、五月二十八日國民政府を左記の顔觸で組織した。

政府委員 汪兆銘、鄧澤如、蕭佛成、陳濟棠、孫科、李宗仁、古應芬、林森、許崇智、蔣尊簋、鄒魯、唐生智、李烈鈞、陳友仁

常務 汪兆銘、唐紹儀、孫科、許崇智、古應芬

軍事委員 陳濟棠、張發奎、白崇禧、張惠長、陳策、許崇智、李宗仁、李烈鈞、唐生智、李福林、唐生明

財政委員 唐紹儀、古應芬

外交委員 陳友仁

政務委員 蕭佛成、鄧澤如、林森、鄒魯、馮祝萬

參軍所長 陳濟棠

廣東政府は北平外交團並に廣東領事團に對し正式に新政府成立の旨を通告し、而して大に其の内容の充實に努力した。其の結果は南京政府に於ても枕を高うし得られざる状態に陥つた。それは云ふまでもなく、北支に於ける反蔣軍閥の擡頭蠢動で、若し廣東と提携することとなりて一時に南北より夾撃される様となれば個別倒壊の戦術も容易に奏効せぬ。加之江西省の共產軍の形勢は、廣東問題發生以來大に活躍し始めた。政府軍一個師全滅され、その他討伐に行つた中にも共產軍に通ずるものも出づるに至つた。で南京政府は大に憂慮し、政治的解決を協議し、廣東派汪兆銘、孫科、陳友仁等と會見、平和解決策を討究さすべく張繼を派遣したが、廣東側に愚弄され遂に空しく北歸したと。

張繼が携へて行つた蒋介石の妥協條件は 一、蒋介石は自發的に國民政府の主席を辭職し後任に蔡元培を推す、但し陸海空軍總司令及び行政院長は従前通りとす。二、伍朝樞を召還して司法院長に任命する。三、

院長及び部長級の者は兩廣側の希望あらば出来る丈此れを容れ政府を改造する。と云ふにあつた。(外交時報 六、七)

南京政府は從來の遣口各個潰倒も容易でない事を知悉してゐるので、廣東側の重要人物と妥協すべく努めた。廣東政府部内でも種々個人的感情の面白からざるものもあるが、此の際内訌、紛糾に依り南京側に内兜を見透かされてはと、汪兆銘、許崇智、陳濟棠、李宗仁等は此れまでの感情を水に流し、固い握手することとなつた。

財力に於ては廣東税關の收入外に廣東財閥により支持される事になり、却つて南京政府より發行されてる諸種の内公債を攪亂すべく、廣東財閥の諸種機關に依り投資され、暴落の一途を辿る光景を呈するに至つた。如何に浙江財閥に依り支持されても財力には限度があるんで悲鳴を擧げんとして居る。南京政府としては廣東新政府樹立は從來ない強敵となつた。

五、南京政府

前述の通り五月五日の國民全體代表會議に於て南京政府の基礎安定と蔣介石の元首擁護の二大法案を提出する事になつたが、廣東側の要人は胡漢民が監禁された事に憤慨し、南京を引揚げた。胡は蔣に取つて眼の上の瘤である。外部の瘤は何うにか取り去る事が出来たが、部内の瘤を取り去るにはなか／＼容易でない、そこで國民會議を召集して約法即ち憲法を制定し、自己を大總統に推さすべく努め、黨部の勢力を殺がんとしたのである。眼の上の瘤即ち胡を去勢する事が出来る、で胡は正面から此れに反對した事に發端して廣東南京の對立となつた。南京側に於ては北方閻錫山、馮玉祥の殘黨の蠢動と江西の共匪に對し、尠からず脅威を感じたのである。蔣鼎文の軍隊、約五萬で北方の雜軍を監視させて居たが、湖北、湖南の共匪一時勢猖獗手の下し様ない状態に陥つた。そこで張學良を味方に

引入れる事が最善である。張さへ北方に頑張つて居れば、此れで抑壓がきく、それに雜軍等は銀丸さへ見舞へば、如何でもなる、張を南京に召致し、到れり盡せる優待をして蔣張の攻守同盟は成立したのである。

五月五日南京に於て國民會議開かれ、八日より十七日まで會を重ねる事八回、而して全文八章八十九條の約法を決議された、此れを見ると全然蔣一個の爲めに作られたものである事が證明される。

國民會議前後より廣東側要人連の反蔣氣勢高まり、加ふるに舊軍閥の反蔣も次第に高まらんとするに刺戟され、對策を講ずべく、六月十三日第五次中央執監全體會議を開催した。此の會議に於ける重要討議事項は一、國民黨第四次全國代表大會召集の件、二、胡漢民復職の件、三、國民政府改造の件、四、廣東討伐の件等で、豫備會議や本會議で、各案を審査委員會に附し翌十四日は丁惟汾首席の下に左の七案通過決定した。

一、廣東事件の處理經過報告及び今後の方針決定案。

- 二、國民政府組織法改正案。
- 三、全國協力して共產軍を討伐する案。
- 四、國民黨第四次全國代表大會を本年十月十日南京に於て召集す。

- 五、中央政治會議委員を改選し左の三十八名に決定す。蔣介石、胡漢民、葉楚傖、于右任、丁惟汾、陳果夫、何應欽、戴天仇、楊樹莊、宋子文、吳稚暉、張靜江、李石曾、蔡元培、林森、王寵惠、張繼、邵力子、朱家驊、邵元冲、陳立夫、孔祥熙、王正廷、王伯群、朱培德、吳鉄城、陳銘樞、蕉易堂、張群、何成濬、劉蘆隱、馬超俊、張學良、張作相、王樹幹、張景惠、劉尙清、方本仁。
- 六、李濟深の黨籍回復は第四次全國代表大會に提出し進認を求む。

- 七、中央黨部の部長は左の通り改選す。

中央黨部秘書長	丁惟汾	同	組織部長	陳立夫
同	張道藩	同	宣傳部長	劉蘆隱
同	陳布雷	同	訓練部長	馬超俊
同	程天放	同		
同	繆培成	同		
同	丁超五	同		

引續き國民政府改造案を討議し、新國民政府組織法を發布する事となつた。其の内重なもの、

- 一、三十八名の外に、何健、徐永昌、陳調元、蕭雲の四名を

追加する件。

- 二、國民政府主席に蔣介石を任命の件。
- 三、五院正副院長を左の如く任命の件。

- | | | | |
|------|-----|------|-----|
| 行政院長 | 蔣介石 | 同副院長 | 宋子文 |
| 立法院長 | 林森 | 同副院長 | 邵元冲 |
| 司法院長 | 王寵惠 | 同副院長 | 張繼 |
| 考試院長 | 戴天仇 | 同副院長 | 劉蘆隱 |
| 監察院長 | 于右任 | 同副院長 | 陳果夫 |

四、陸海空軍總司令に蔣介石、同副司令に張學良を推舉の件
 此れに依つて觀ると如何に廣東側並に中立派に氣兼ねせるかと窺はれる、此れで南京政府は陣容を樹直し共產軍討伐と對廣東の威容を示した。(六年七月一日の外交時報)

一方對廣東妥協を策しながら、共匪討伐に乗り出し終熄に近からんとする際、廣東、廣西軍の江西、湖南侵入となり、偶滿洲に於ける萬寶山事件、引續き鮮支人衝突事件、石友三軍の反亂、折り重つて一時に内外共に、艱苦の極に達した、蔣は石軍の蹶起は内部的に觀て廣東側との聯絡には缺陷あるを認知し、山西、馮

雜軍の糾合して石友三と合流せざる様に切り崩し運動を策し、張學良を北方實力者として儼立せしめ、石軍を窮地に陥らしめる事とした。爲に石軍は韓復榘の斡旋で歸順する事となつたのである。で北方の突發事は一時少康を得た。併し從來以黨治國は餘り過激に流れ不羈奔馬の狂暴を敢へて爲すに至つた。學匪を使嚇しては、反日、抗日、侮日、反日會等と種々なお題目を構へさせ、果は經濟絶交、對日宣戰の氣勢を煽つて居る。口に不平等條約撤廢、治外法權撤消を泡吹きながら、國法皆無備の醜態を曝露して居る。蔣の心中健在なりや否、眼の上の大瘤で彼に取つては終生萬死誓つて、日本の帝國主義を除去する。若し能はされば支那統一、中華民國の安寧は維持されぬと、防蔣の大旗を押し立て、大に愛國熱を鼓吹して居る。一度日本政府より所有排日行動に就いて嚴に抗議し取締方を要求するや、態の好い聲明をなし暗に愛國心を喚ぶ様に努めて居る。護謨球式外交術は誠に仕末にをへぬものである。

渦の支那

る。斯うして一日一日と過ぎて行く南京政府は眞に浮草式或は人氣取策で一寸ずりにする外に方途がないのである。慥に死の影は差して居た。が外觀を糊塗するに妙を得てる支那人の事であるから、容易に内兜を見透かされない、八月二十七日支那政治史上劃期的な催として國民黨中央執行委員會は明二十一年度の豫算編成を審議し、豫算の決定を見るに到つた。總豫算額は九億七千七百八萬七千七百六十一元となつて居るが、細述は省略す。其内の軍費を掲げると四億六百六十一萬七千二百二十元となつて居る、總豫算の約半分に近い豫算をとつて居る、此れで見ても國防費以外の經費が計上されて居るのが分る。

廣東政府は滿洲事變の報に接するや、最高委員會を開き左の如き要旨の宣言を發表した。

獨裁專制の本尊たる蔣介石の下野を實現し、民主集權政治を實施せんと、蔣自發的に下野せば廣東政府も亦自發的に取銷すべし云々と。南京、廣東兩政府間の

妥協問題は九月初旬には相當の程度まで進捗して居たが、滿洲事變後蔣は又々居据り意志を表示したので、張繼、吳鐵城等居中調停に一時窮地に立つ事となつたが、南京政府の背景とも云ふべき浙江財閥連が張靜江を主として妥協に傾いたために蔣も心動き、九月下旬蔡元培、陳銘樞、張繼等南下し、廣東側の汪兆銘、孫科、伍朝樞、李文範、馬超俊等と會合、數次會議した結果十月二日大體左記の如き妥協案が成立したと。

- 一、蔣介石の下野。
- 二、蔣介石下野と同時に廣東政府取消を宣言す。
- 三、兩政府より各三名宛の委員を出して準備委員會を組織し合流に關する具體條件を準備す。
- 四、準備委員會決定事項を十一月十二日中國々民黨第四次全國代表大會に附議す。
- 五、外交方針は廣東政府の方針に據る。(外交時報六、一〇、十五、南京廣東兩政府合流か)

當時兩政府委員等は上海で會商する事となつて北上した、會商の成行は大體十月二日の妥協案に依り着々進行してゐるものゝ如し。南京政府側が今までない弱腰

となつた、もう斯うなつては浙江閥或は蔣閥の南京政府の脈膊は硬化しつゝありと診斷出來そうだ。此の診斷は餘り遠からざる内に實現されると思ふ。尙ほ一つ財政的に一瞥して置いたら必ず首肯されるだらう。

政府の財政を賄ふ確實な収入は關稅であつて地方の諸稅は中央を賄ふ爲に送金するものは殆んど皆無、地方政費軍費に抑留される、南京政府は地盤として上海を有つてゐる文關稅については他地方より最も恵まれてゐる。が從來の收入より推算すると本年度は多く見積つても二億八、九千萬元位だらう、此の内より内外債の元利償還すべき總額が約二億八、九千萬元ある、關稅收入よりは政費に振り向けられるものは幾何もない。關稅について財政支持には内債收入である、一體財政上の根本要求は經常歲入でしなければならぬ。それを公債收入に依てゐるのである。以上の外に確實なる收入となつてゐるものは、鹽稅、捲煙稅、印花稅及び統稅等で此れ等も亦皆内外債の擔保となつてゐる。關稅其

その他確實なる収入は全部擧げて諸内外債の擔保に供され、此れ以上公債の發行は不可能となつてゐる。南京政府が如何に財政的窮地に陥つてゐるか、窺はれる。浙江財閥も此れまで支持すべく努力して來たが、廣東財閥が公債の投資した爲め、未曾有の暴落を來した、此後の支持については餘り多くは望めまい。

地盤即ち勢力圏内に就いて云へば、河南、山東、江蘇、安徽、浙江の五省は南京政府に忠實なるものと推測されるが、其の他の省に就いては先づ灰色と云つて置く方が至當らしい。西北に安福系の舊軍閥、江南に共匪、南に廣東新政府、唯一の頼みとせる東北政府張學良は日支衝突事件で殆んど再起の見込なく、全く無援孤立の状態となつた浙江閥南京政府蔣の下野は遠からず、實現される、而して廣東側の要人等が中央政府を乗取る事となるに違いない。

由之觀之支那の統一は何時になつたら實現されるものか、實に此の命題に就いては誰もが明答出來ないの

である。戰國時代の群雄割據を目のあたりに見せて貰つてゐるのである。

渦の支那を正視せんとするには、上述せる五方面の狀況を注視し各方面の策動者の連繫と地盤との關係を知るにあり。この五方面の消長については豫斷を許さざるも、大體に於て張學良の東北政府及び蔣の南京政府は四圍の情勢により餘り多くの望を囑する事は出來ない。されば將來、滿洲問題に就き日支直接交渉を開かんとするも南京政府は到底その衝に當る事は出來ないと思ふ。之に代つて出づる廣東派南京政府も亦同様だと思ふ。奇術策謀の多き支那の人士も今や、落日の過程を辿りつゝある。筆者は若し日本が直接交渉を爲す場合、何の政府を相手とすべきかに就いて各方面より討究を試みた、その結果、對日理解ある政府を撰ばねばならぬ事は云ふまでもない、而してそれには滿蒙に於ける新政府樹立を援助し強固なる國家を形作らせる事が緊要である。而して日本の生命線を徹底的に知

らしめ、共存共榮を確守させるにある。混沌たる全支那の形勢は四分五裂群雄割據の舞臺として、放置する外あるまい。要するに全支那は五個或は六個の國家を形成して統治する事が最も支那を治める捷徑だと信ずる。(六年十二月十日)